

震災復興リーダー支援プロジェクト

Support our Disaster Recovery Leaders - Relieve, rebuild and re-start Japan

経過報告レポート (2011.9.12-10.11)

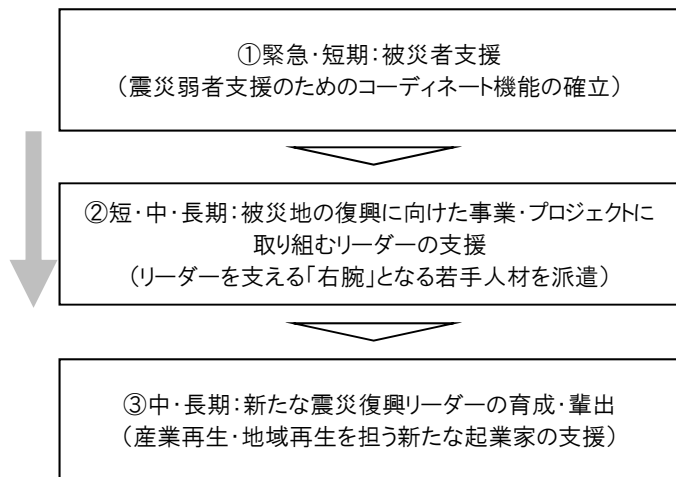
1 右腕派遣へのニーズの高まりを受け 支援先プロジェクトを拡大

「震災復興リーダー支援プロジェクト」では、7月6日に開催したキックオフフォーラム&マッチングフェアに続く第2回目のマッチングフェアを10月1日に開催しました。

これに合わせて、右腕人材の派遣を希望し、「震災復興リーダー支援プロジェクト」事務局との間で調整を行ってきた12の団体やプロジェクトについて、右腕参画希望者からのエントリー受付を開始しました。

新たなプロジェクトが加わったことで、支援先は32となり、「3年間で50プロジェクトに200人」という右腕派遣事業の新たな目標に向けて大きく前進しました。加えて、マッチングフェア参加者からの右腕へのエントリーも順調に推移しています。

引き続き地域からの右腕人材へのニーズを丁寧に掘り起こしていくとともに、次月以降は、支援先数や活動中の右腕人材の数が一定の規模に達したことを受け、右腕人材への研修プログラムの実施や、各プロジェクトへの事業に対するハンズオン支援の充実に取り組んでいく予定です。



■新たに募集を開始したプロジェクト

一般社団法人パーソナルサポートセンター	
受入団体	一般社団法人パーソナルサポートセンター
活動地域	宮城県仙台市
事業概要	仙台市と協働し、仮設住宅のコミュニティづくりや入居者のサポートを実施。加えて、コミュニティワーク創出事業として、仕事を通じた生きがいづくりにも取り組み、生活・就労両面の支援を行う

東日本大震災リハビリネットワーク ~face to face~	
受入団体	東日本大震災リハビリネットワーク ~face to face~
活動地域	岩手県陸前高田市、宮城県石巻市(雄勝地区)
事業概要	高齢化率も高く、地域の医療介護体制がダメージを受けた地域において、理学療法士、作業療法士などの医療専門職や介護専門職の有志による支援活動のコーディネートを実施

ドラムカフェジャパン	
受入団体	ドラムカフェジャパン
活動地域	宮城県
事業概要	避難所や学校でのドラミングのプログラム実施を通じて、子どもたちの元気を取り戻す活動を展開。専門医師と連携したメンタルケアや、高齢者向けのプログラムの実施も予定している。

みやぎ連携復興センター	
受入団体	みやぎ連携復興センター
活動地域	宮城県
事業概要	復興に向けた宮城県内の各セクターの連携組織として、地域別・テーマ別の連携会議のコーディネートなどの「つなぐ」活動と、新たな担い手を「育てる」活動に取り組む

せんだい・みやぎNPOセンター事務局助っ人	
受入団体	NPO 法人せんだい・みやぎ NPO センター
活動地域	宮城県
事業概要	日本を代表する民設民営の市民活動支援組織であるせんだい・みやぎ NPO センターによる、地域のNPO等と外部リソースとのコーディネート事業。復興に向けた活動を持続させる基盤づくりを目指す

MAKOTOプロジェクト	
受入団体	一般社団法人 MAKOTO
活動地域	東北地方全域
事業概要	被災地の「志」ある企業・起業家への支援と、コミュニティの形成のための活動を展開。新たな金融支援スキームとして非営利型ベンチャーファンド「MAKOTO ファンド」の立ち上げを予定している。

復興応援団	
受入団体	一般社団法人復興応援団
活動地域	宮城県沿岸部
事業概要	復興支援のボランティアツアーの実施を中心に、一過性のボランティアではない「ファン」の形成と地域内外のネットワークづくりに取り組み、地域の復興まちづくりをエンパワーしていく

ローカル鉄道による地域再生のモデルづくり	
受入団体	ひたちなか海浜鉄道株式会社
活動地域	茨城県ひたちなか市
事業概要	地域ぐるみでの経営再建のさなかに震災で大きな被害を受けた湊線。一企業としての経営改善を超え、「鉄道」を通じた地域コミュニティの活性化、まちおこしのモデルづくりを目指す

気仙沼・情報発信力アッププロジェクト	
受入団体	株式会社斉吉商店
活動地域	宮城県気仙沼市
事業概要	Eコマース戦略等を通じ、気仙沼の各生産業と消費者とのダイレクトな関係を築くことで、産業の復興と持続的な成長を図るとともに、地域全体で情報発信スキルを持った人材育成に取り組む

なつかしい未来商店街プロジェクト	
受入団体	なつかしい未来創造株式会社
活動地域	岩手県陸前高田市
事業概要	陸前高田市の経営者たちによる商店街の復興プロジェクト。ハードとしての店舗の復旧だけでなく、地域コミュニティの核となるような、なつかしくも先駆的な商店街をプロデュースしていく

大船渡仮設住宅支援員配置支援プロジェクト	
受入団体	きたかみ復興支援協働体
活動地域	岩手県大船渡市、北上市
事業概要	地域内の仮設住宅に支援員を配置し、住民の健康で前向きな生活の実現のサポートを担うことで、地域の「繋がり」と生業の再生を目指す。NPO・民間企業・自治体の協働による事業

2 右腕インタビュー —現地での活動と、これからへの思い—

今回は、気仙沼市の大島地区において、被災者のニーズをアセスメントする「つなプロ」の地域展開に従事した梶原大試氏（つなプロ・気仙沼大島）、南三陸町において、地域の再生と雇用の創出に取り組む村井香月氏（南三陸復興アトリエプロジェクト）のお二人のインタビューをご紹介します。

本欄では、毎回2名ほどの右腕にインタビューし、参画のきっかけから、現地での具体的な活動、右腕の経験を経てのこれから

の自身のビジョンや地域や社会への思いまで、一人ひとりの右腕のありのままの声をお伝えしていきます。

梶原氏は、ETIC.を含む宮城・関西・東京の複数団体が連携して始まった「被災者を NPO とつないで支える合同プロジェクト（つなプロ）」の活動にボランティアとして参加しました。

その後、つなプロの活動が緊急支援フェーズから移行し、地元の団体と連携して被災者を継続的に支える仕組みづくりを展開する段階で、右腕として改めて参画。6月から8月の3か月間、気仙沼市の大島地域で活動しました。

—右腕として参画されたきっかけを教えてください。

4月にETIC.のインターンシップセミナーに参加した際、つなプロの存在を知りました。被災地での支援活動に興味があったため、ボランティアに参加しようと思いました。

そして、気仙沼で避難所でのアセスメント活動に従事しましたが、1週間という短期間でできることはどうしても限りがあると感じました。そこで、被災地の復旧・復興のために一定の期間取り組みたいと思い、右腕としての参画を決めました。

右腕派遣先のプロジェクトは他にもありましたが、やはり、一度ボランティアとして関わった地域で、会ったことのある人たちと長期的に活動していきたいと思ったこと、それに、つなプロの「ケアが及ばないマイノリティの方々を支える」というミッションへの強い共感があったため、気仙沼大島でのつなプロの地域展開の活動を選びました。

—右腕としての活動の内容はどのようなものでしたか？

入った当初、大島にはボランティアセンターがありませんでした。複数のボランティア団体が現地入りしていたものの、ボランティア団体どうしの連携がなかったため、それぞれの活動が非効率なものとなっていました。

そこで、右腕として参画した最初の2か月間は、現地の災害対策本部、地元の方々と協力し、ボランティアのコーディネートをする事務局の立ち上げと運営を行いました。

3か月目は、大島で全島アセスメントを実施することとなり、オペレーションリーダーを担当することになりました。地域の方々のニーズを調査し解決していくため、各々のスタッフに地域を振り分けて一軒一軒訪問を開始しました。アセスメントで吸い上げられたリアルな情報を整理し、その情報を看護師や介護士などの専門職のボランティアメンバーにつなぎ、訪問してもらいました。ニーズによっては、大島内の施設や、気仙沼の病院との連絡・調整も行いました。

また、大島から気仙沼本土までフェリーで移動される方を対象に、自分の車を使って病院への移送サービスをしている方がおり、その方と連携して、ケアが必要な方を対象としてボランティアの移送サービスも展開しました。

—3か月の活動を通して感じたことを教えてください。

全体を通して学んだことは、支援する側と立場を分けて考えるのではなく、地元の人たちが立ち上がることを一緒に支えていくことが大事だということです。

支援活動は、自分たちがやりたいことをやるわけではありま

せんし、現地の人たちには現地の人たちのペースがあります。外から入った人がやりたい活動をやりたいように進めようと、互いにストレスが生まれたり、軋轢に発展してしまうこともあります。

自分たちの思いがあっても、まずは一度我慢して、相手がどういう状況なのか、どういう気持ちなのかを考え、トラブルにならなないように配慮してかなければなりません。

—現地に入った前後で、どのようなギャップがありましたか？

ボランティアに入っていくことはいいことだと思います。しかし、一方で、被災地ではボランティア疲れも起きてしまっている。これは非常にもったいないと感じました。

多くのボランティアは短期で入ってくるため、しばしばボランティアの都合に合わせて地元の人が動くという状況が起きてしまいます。ボランティア自体は有難いことだとしても、それを受け入れるには、様々な調整や実務が発生し、多くの手間を要します。

そこで長期で入っているボランティアが、短期のボランティアの受入や調整業務を引き受けることで、現地の方々の負担を緩和する役割ができると思い、活動を続けていました。

—期間中、特に印象に残ったエピソードは？

一度お休みをもらって現地を離れ、大島に戻った際のことです。現地の方々が OBAKA 隊というチームを作り、がれきの撤去などに取り組んでいるのですが、その皆さんから「梶くんがいるとほっとする」と言っていたことが強く心に残っています。

現地の方々と信頼関係を築くことができただけでなく、自分がやってきたことが認められたという思いが得られました。

つなプロでは、ボランティア同士、島の人同士でいざこざがあったときに、できるだけ筋が通った、正しいことを意識して活動してきたので、そういう姿勢が認められたと思えたことは嬉しかったです。(写真：仮設住宅訪問時の一コマ)



—右腕としての活動を終えた今、震災復興やこれからの社会への関わり方にどんな思いをお持ちですか？

私は、これまでずっと東京育ちだったため、地方で暮らすという経験がありませんでしたが、今回の活動を経て、今の日本の問題は地方にあるということを実感させられました。

大島は人口の半数以上が 50 歳以上という地域で、地域に子どもの姿があまり見られず、活気がありませんでした。活がないがために、未来に希望が持てない。少子・高齢化の進行が経済や社会のあり方に大きく影響してくると言われていますが、実感を持ってこの問題に取り組みまないといけないと思うようになりました。

こうした思いから、将来的には地域経営に携わっていきたくて考えています。

新しい日本の未来をつくっていくカギは、地方にあるのではないかと思います。これからは、まず地域があって、そして日本があってというように、地域を起点にしつつできるだけ広い視点で物事をとらえていきたいと思っています。その上で、自分たちの地域がどこに向かっていくのかを考え、住民・民間・行政といろんな人たちでコミュニティを創っていく。自分の関わるコミュニティをいいものにしていきたいという思いを、多くの人々で共有できるようにしていくことが大切だと思います。

単に仕事や社会保障があれば人は幸せになるというものではなく、よいコミュニティがなければいけない。いずれも欠かせないものであるということを経験から学びました。

■村井 香月 氏（南三陸復興アトリエプロジェクト）



村井氏は、南三陸町の入谷地区における特産品づくり、雇用創出プロジェクトである南三陸復興アトリエプロジェクトに9月から参画しています。

南三陸復興アトリエプロジェクトは、グリーンウェーブ入谷構想促進委員会という、以前から存在した地域おこしの組織が中心となり、復興タコ（旧志津川はタコの水揚げで有名）の置物、

休耕田を再利用し加工する復興菜、復興漬などを通じて地元の雇用を確保し、復興に結び付けていくことを目指しています。そして、中長期的には、それらの事業を回していく中で得たノウハウや外部人材の協力を生かし、新たな製品の開発や事業化による地域活性化を目標としています。

—右腕派遣に応募したきっかけはどのようなものでしたか？

もともとこの6月に会社を辞めることを決めていて、次を考える中で、7月に被災地でのボランティア活動に参加しました。

石巻や陸前高田で実際に活動してみて、短期のボランティアだと、受け入れ側との関係性においてどうしても甘えが生じてしまうということを感じました。そして、「長期の関係であれば、信頼関係が生み出せ、受け入れる側にとっても参加する側にとっても大変よい効果が出るのに…」と思っていたところ、ちょうどこの右腕派遣事業のことを知り、エントリーしました。

—なぜこのプロジェクトを選んだのですか？

右腕派遣プロジェクト以外のものも含めて、いろいろな可能性が考えられましたが、何よりも自分が一番貢献できる分野を選びたいと思っていました。

NGO でのボランティアコーディネーターなども合っているかなとは思いましたが、前職がフェアトレード商品を企画開発

して販売する会社での営業を中心とした業務だったので、背景のある商品売ることに携り、力を発揮したいと考えたのです。

さらに、できることなら営業を中心に、数字の管理や広報など新しいことにもチャレンジしてさらに自分を成長させたいと思う中で、このプロジェクトに出会いました。

一南三陸のプロジェクトはどんなプロジェクトなのか

南三陸はタコが名産品で、震災前から地域おこしの一環で「オクトパス君」という合格祈願グッズを売り出し、人気を集めていました。

現在は、その「オクトパス君」を軸に、置物やバッジなどの商品を作り販売しています。震災で仕事を失った人が多くいる中で、地域に雇用を作り出すのがこの事業の目的です。

オクトパス君を作っているのは、廃校をリノベーションして作られたYes工房というところですが、ここでは女性を中心とした人たちが働いていて、家をなくした人、家族をなくした人など震災の直接的な被災者の方も多いです。

一現在、具体的にどんな業務を担当されていますか？

幅広くやっています。主としては、企業や団体の方の対応、新商品の企画・開発、メディア対応、ブログやTwitterを通じた情報発信などです。

そのほか、イベントの際の出展、委託している仕事の管理、地域でこのプロジェクトの旗振り役になっている公民館長の阿部さんのアイデアに基づいた新しいプロジェクトの資料作り、販路や提携先の開拓など、領域はどんどん広がっています。

一参画から2か月が過ぎましたが、右腕として残りの期間をどのように関わっていきたいですか？

なんだかとても難しい質問ですが、2点ほどあります。

まずは、長期間滞在の右腕として地域にどっぷり入っていないながらも、やはり第三者的な視点を提供し続ける存在でいたいということ。2つめは、右腕としての目の前の成果だけにこだわることなく、10年先を見越したビジョンを館長・会長と共有し、町の将来を考える1人でいたいということです。

もちろん私ができることに限りがありますが、マインドとしてはこれらのことを大切にしたいと思うようになりました。

外から支援に来る人の中には、目の前の「見える」成果に集中しがちな人も見受けられます。しかし、ただやみくもに「復興」を唱えるばかりでは10年先は見えてきません。どうしたら若者が未来を夢見ることのできる町になるかといったビジョンを持った人が地域にどれだけいるかで、変わっていくのではないかと考えています。

周りで動かれている地元の皆さんが、危機感を持ちつつ実際にアクションを起こしている方たちなので、そういった思いのある方と働くことができ本当に幸せだと感じています。

の事業説明会を開催しました。

■緊急！戦略ミーティング&「右腕」マッチング説明会 vol.2 避難者と地域住民を繋ぎながら新しい「仕事」を創りだす@福島 9月12日(月)

9月12日(月)、ETIC. セミナールームにおいて、8月6日(土)に続き第2回目となる戦略ミーティングを、多数の福島県出身者をはじめとする30名超の参加を得て開催しました。

今回は、被災県の中でも、原発問題を抱えて復旧・復興に独自の困難さが伴っている福島県での取り組みを取り上げました。会津地方において、原発近隣自治体からの避難者の支援活動を行ってきた株式会社明天の貝沼航氏と、同じく郡山地域で活動しているSNC ぴーなっつの岩崎大樹氏をお招きし、福島県内の現状を語っていただくとともに、様々な業種や立場の参加者を交えて意見交換を行いました。

震災による直接的な被害に加え、遠方での長期にわたる避難生活を余儀なくされている原発近隣自治体の問題、放射能問題による産業へのダメージなど、長期的な粘り強い対策が必要とされる厳しい状況を前にしながらも、会場内は予定を超える参加者数と郷里のために何か役立ちたいという強い思いで大変な熱気に包まれ、終了後も参加者同士の意見交換が途切れなく続きました。

■震災復興に関する情報交換会

9月22日(木)

9月22日(木)、ETIC. セミナールームにおいて、メディア向けの情報交換会を開催しました。

これは、マスコミ各社からの問い合わせが増加してきたことを受けて、「震災復興リーダー支援プロジェクト」の全体像の紹介と情報交換を目的に企画してものです。

当日は、新聞・TV各社から7名の記者の参加を得て、説明と質疑、交流を合わせて1時間半のプログラムで実施しました。多忙な中にもかかわらず、いずれの方もほぼ全体を通してご参加いただき、プロジェクト全体はもとより、支援先の個々のプロジェクトに関する質問や具体的な取材の申し出などもいただくことが出来ました。



■SVA(ソーシャル・ベンチャー・アライアンス) ETIC. 震災復興リーダー支援プロジェクト戦略会議 ～気仙沼・斉吉商店～

—9月30日(金)—

8月26日(金)に開催した「ETIC. 震災復興リーダー支援プロ

3 トピックス (2011. 9. 12-10. 11)

今月期は、7月に続いて大規模なマッチングイベント開催したほか、プロジェクト支援のための戦略ミーティング、プレス向け

プロジェクト戦略会議～復興プロジェクトをいかに加速できるか？被災地のイノベーションに向けてベンチャーは何ができるのか？～」に続き、次世代起業家の育成とソーシャル・イノベーションの創出をめざすネットワークである SVA（ソーシャル・ベンチャー・アライアンス）による戦略ミーティングを開催しました。

第2回目となる今回は、宮城県気仙沼市において、自社事業の水産加工・卸・小売業の復興だけではなく、気仙沼のまち全体の発信力強化に取り組もうとしている株式会社齊吉商店の齊藤和枝専務をお招きし、参加の企業家とともに、進むべき方向性や具体的な戦略・戦術について議論を深める場として企画しました。

齊吉商店の被災時のエピソードからその後の事業再興への取り組みなどは、コピーライターの糸井重里氏が主宰するWEBサイト「ほぼ日刊イトイ新聞」で紹介されたのをはじめ、各メディアで取り上げられ、大きな注目を集めています。

当日は、出版、WEBサイト運営、ネットセキュリティや経営支援など、テーマに相応しい企業が集い、地域全体のブランディングや消費者と直接つながる直販モデル構築にあたっての課題、持続的な取り組みを可能とするための地域の人材育成などについて、熱心な議論が繰り広げられました。

今回の議論は、齊吉商店の今後の取り組みだけではなく、派遣する右腕人材の役割をはじめとしたETIC.方針にも反映させ、生かしていくこととなります。



■「右腕」マッチングフェア in Autumn

—10月1日（土）—

10月1日（土）、日本財団ビルにおいて、7月に開催した「キックオフフォーラム&マッチングフェア」に続く第2回目となる右腕人材マッチングイベントを開催しました。

今回は、参加プロジェクト数の増加もあいまって、午前午後の二部制となりました。午前中の第一部は「教育・福祉・看護～被災地の子どもたちや仮設住宅の暮らしを支える～」として、午後の第二部では「産業再生・コミュニティ再生・中間支援～地域産業の再生や地域課題に挑む～」として、それぞれ7プロジェクト、合計14のプロジェクトが、参加者に向けたプレゼンテーションとブースに分かれての個別説明会を行いました。

参加者も、100名余りの事前申し込みに加え、30名近い当日参加があり、あわせて140名近くの参加を得て大いに盛況となりました。次号では、このイベントを経てのマッチング数の伸びなどもご報告できると思います。

また、TV・新聞各紙からの取材もこれまで以上に入り、被災地

への関心の薄れが懸念される中であっても、震災復興リーダー支援プロジェクトへの注目は増しているということが窺えました。



震災復興リーダー支援プロジェクト ご寄付、ご支援のお願い

本プロジェクトについては、スタート以来、国内外の個人・団体・企業の皆様より大きな関心を頂戴し、現在のご寄付の総額86,477,418円のほか、民間企業や国内外の財団から引き続き支援に関する照会をいただいております。

しかしながら、右腕人材の派遣をはじめとして、現地で復興の取り組む人々からの支援のニーズは予想以上に高く、右腕派遣の目標を「50件のプロジェクトに200名」と当初の倍に設定しなおしたのをはじめ、各プロジェクトへのハンズオン支援の充実、新たなプロジェクトのインキュベーションやスタートアップ支援など、震災復興リーダー支援プロジェクトの全体像の再構築に取り組んでいるところです。

これに伴い、総予算額も3年間で3億3千万円という想定から、6億円以上の規模となる予定で、改めてファンドレイジング戦略の強化を実施してまいります。

皆様におかれましては、「震災復興リーダー支援基金」のPRへのお力添えをはじめとして、事業連携や各プロジェクトへの個別のご協力など賜りますよう、引き続きよろしくご願い申し上げます。

信頼資本財団 「震災復興リーダー基金」

» <http://www.shinrai.or.jp/fukkou-shien/etic2/>

連絡先・お問い合わせ先

◆NPO 法人 ETIC.内

震災復興リーダー支援プロジェクト 事務局(担当:山内・辰巳)

東京都渋谷区神南 1-5-7 APPLE OHMIビル 4階

mail : fukkou@etic.or.jp

Web : <http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/index.html>